NEWSLETTER No. 75
ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music
January 20, 2009

社団法人
東洋音楽学会
会　報
第 75 号

発行 (社) 東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号　TEL/FAX 03-3832-5152
E-mail : LEN03210@nifty.com　ホームページ : http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/

目　次

会長就任のご挨拶 …… 1
第 59 回大会レポート …… 1
ＩＣＴＭ（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ …… 8
臨時理事会のお知らせ …… 9
学会ホームページがリニューアルしました …… 9
会員の受賞 …… 10
会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ …… 10
第 26 回田邊尚雄賞アンケートのお願い …… 10
会員異動 …… 10
図書・資料等の受贈 …… 12
新刊書籍 …… 12
新発売視聴覚資料 …… 13
編集後記 …… 13
第 39 回通常総会議事録（抄）・添付書類 …… 14

会長就任のご挨拶

金城　厚

このたび会長の大役を仰せつかりました。役者不足ではありますが、精一杯務める所存ですので、会員各位には何卒よろしくご協力賜りますようお願い申し上げます。

東洋音楽学会はここ 10 年余りの間に大きく世代交代が進みました。ほとんどの理事が 20 世紀後半の世代です。岸辺先生、吉川先生のような、学会を創設し、発展させてきた世代の先生方はすでに引退され、私などは辛うじて両先生の講義で単位をいただいた最後の年代で、理事のほとんどが孫弟子の世代にあたります。このことは、この学会の中心分野である日本音楽史や民族音楽学の方法論、学問としてのありかたも大きく変わってきたことを意味すると思います。

東洋音楽学会の緊急の課題は、こうした学問の新しい局面の変化を逐一情報提供していくこと、全国学会としての機能をきちんと果たせるシステム作りにあると思います。数年前に機関誌の表紙体裁が変わったことは、その画期を象徴するできごとだったと言えましょう。私はそうした先輩方の始めた新しい歩みを滞らせることなく、より大きな歩幅でこれを引き継いでいきたいと考えております。

なお、2009 年度の大会は、私の所属する沖縄県立芸術大学で開催される見通しです。多くの会員諸氏とお会いできるのを楽しみにしております。

第 59 回大会レポート

（2008 年 11 月 15〜16 日／武蔵野音楽大学）

第１日（11 月 15 日）

◇楽器博物館特別展および特別公演「板橋の田遊び（赤塚諏訪神社）」

今大会の会場は、都内の立地に恵まれた音楽大学であった。その特色を生かし、大学楽器博物館の見学ツアーと隣接区の伝統芸能である田遊びが初日に企画された。

武蔵野音楽大学楽器博物館は、休館日を返上して両日とも開館され、初日の開会前の 11 時と 12 時に、館員のガイドによる約１時間の見学ツアーが実施された。本大学の楽器博物館は、入間キャンパスにもあり、そこには、故水野佐平氏による和楽器の「水野コレクション」が所蔵されている。今大会のために、コレクションの一部が江古田に移され、特別展が開催された。１階ロビーと３階の展示室において、笙、篳篥、竜笛、高麗笛、小鼓、箏、三味線、胡弓のほか、箏爪、箏柱、鈴付き印籠などの由緒ある楽器類が展示されていたが、いずれも姿かたちが端正で装飾が美しく、入間キャンパスのコレクション全体にも興味が引かれた。一方、常設展では、展示の点数に圧倒されるとともに、多くの楽器が、ガラス越しではなく直接に見られる展

示方法に本館の特色が感じられた。たとえば、もともと食堂であったという広い１階には、鍵盤楽器が 100 点近く並び、クララ・シューマンのピアノ、ナポレオン３世のピアノといった、貴重と思われる楽器がみごとに目の前に並べられているのであった。２階と３階の各展示室では、アジア、中東、オセアニア、アフリカ、ヨーロッパの地域別に数多くの楽器があり、それを見ることによっておのずから地域の特色が感じられ、至近で見られる彩色や線描の美しさに魅せられた。また、館員のガイドでは、壁一面に掛けられた歴史的なホルンを前に、その成り立ちが説明されたが、実物を前にするとすんなりと頭に入ってくるのが不思議であった。このときちょうど、館所蔵の楽器を用いて雅楽の練習が行なわれており、所蔵楽器がしまい込まれたままでなく、活用されていることにも感心させられた。

午後、隣のベートーヴェンホールに場所を移し、特別公演「板橋の田遊び」が、赤塚諏訪神社田遊び保存会の会員によって行なわれた。はじめに野川美穂子理事より、スライド付きで概要が説明され、予備知識が得られた。本来は２月 13 日の夜に神社の境内と近隣の広場で行なわれるが、今回は、場所をホールに移し、抜粋で上演された。舞台奥には四方を竹で囲った「モガリ」が設けられていた。

[板橋の田遊び(赤塚諏訪神社)：花籠の駒]　撮影:宮森庸輔氏

上演は、太鼓の上に立って呼びかける「五月女の呼び込み」で幕を開け、続いて、晴れやかな太鼓と笛の音とともに５メートルはありそうな長い花籠が登場し、30 余名の会員が舞台上を練り歩く「渡御」によって、会場はお祭り気分となった。獅子の舞を含む「花籠」、モガリの前での「天狗御鉾の舞」ののち、稲作の行程を擬似的に再現するモガリ行事が、18 の部分のうち「苗代」「田打ち」「種まき」「田植え」「倉入れ」を選んで上演された。モガリ行事は、モガリの中央に置かれた太鼓を田に見立て、太鼓を囲んで大稲本と鍬取数名が問答しながら粛々と行なわれたが、途中、「五月女の呼び込み」、弁当を差し入れする「ヨネボウの登場」、男女が掛け合う「太郎次と安女の登場」が挿入され、素朴で生き生きとした表現が堪能できた。

[板橋の田遊び(赤塚諏訪神社)：天狗御鉾の舞]　撮影:宮森庸輔氏

もはや板橋区内で稲作は行なわれず、稲作経験のある会員も少ないと聞いたが、太鼓と笛の音色で彩られた田遊びの神事は、地域の人々にとって毎年の楽しみであるにちがいなく、本来の目的は失われても、祭りとして次世代へ継承されていくのだろうと思われた。　　（福田千絵）

◇シンポジウム「日本音楽研究の学際化と国際化」

専門が日本音楽か民族音楽学かにかかわらず、東洋音楽学会のメンバーとして全員が共有できる・すべき問題として有意義なテーマであった。提起されたさまざまな論点を、研究の焦点、方法、アウトプットあるいは言語の問題に集約してコメントしたい。

日本音楽とは、外国人ほど容易に見いだせるものかもしれない。外から眺めてこそわかる。これを土田氏は英国留学経験に基づいて客観視という言葉で語った。異なる視点を学び、自文化を再帰的に捉えなおす。こうして日本音楽を相対化する営みは、その研究の国際化の重要な一歩に違いない。もっとも、日本音楽はけっして一枚岩ではない。ギラン氏が指摘したように、沖縄音楽は日本音楽の古層として重要視されるも民俗音楽として別種扱いされ、その位置づけはアンビバレントである。研究の焦点によって、表象される日本音楽の姿も変わりうることは確かだ。

外国での／外国人による日本音楽研究は、時田氏の指摘（フィールドワーク、文化の中の音楽研究、比較等）をみると、民族音楽学と重なる。日本国内の研究は、「タコツボ化」とはいえ、研究の蓄積とそれを共有するコミュニティは貴重である。どちらが良いか悪いかではなく、両者を使い分け、議論や発信の相手によって内容のレベルを変えることも重要になるだろう（矢向氏が指摘したように、話のレベルを保つ＝下げないことが共有すべき知識の最低ラインを示すことにもなりうるが）。

また、とくにゴチェフスキ氏から提言されたアジアとの関係強化に賛同した。国際化とはかならずしも欧米化ではない。韓国や中国などアジア周辺諸国の研究成果を参照することは歴史的にみても生産的に違いない。（日本の洋楽受容研究がアジア諸国の事例を参照しようとしていないと

いう批判は達見だ。）

そして研究のアウトプットという点では、言語の問題が大きく関わる。ここでも使い分けが重要であろう。日本語だからこそスムーズにできる議論、逆に英語（外国語）だからこそ共有されうる議論がある。それをみきわめ、必要な国際化を行うこと、それこそがゴチェフスキ氏のメッセージ「無駄な国際性をやめよう！」であろう。

パネリストも主張したように、形ばかりの学際化・国際化にとどまらない活動を行いたい。そのために、研究の焦点や発表の対象をみきわめ、レンズの絞りを自在に変える器用さも必要になるだろう。住み分けではなく、ひとりの研究者がさまざまなレベルの研究・発表を時と場に応じて往復する使い分けができれば理想的ではないか。

当日何よりも惜しまれたのは、時間不足で、フロアも交えた議論がほとんどできなかったことである。パネリスト各人の発表や提言が興味深く充実していただけに残念であった。（金光真理子）

◇懇親会・田邉尚雄賞受賞祝賀会

田邉尚雄賞受賞祝賀会では、受賞者のグローマー氏と谷氏が、その日の合言葉となった学際化・国際化に触れながら、それぞれの研究の舞台裏を語ったことで、会場は笑いと共感の渦に巻き込まれた。また、学会の今後をめぐって、若い研究者が海外との折衝を経験する重要性（茂手木氏）、研究者と演奏家のコラボレーションを計っていく必要性（釣谷氏）など、心ある発言もあった。（金光真理子）

第２日（11月16日）

◇研究発表１Ａ（司会：伏木香織）

他者に開かれた「聖なる音楽」―バリ島カランガッスム県トゥガナン・プグリンシンガン村の鉄製ガムラン「スロンディン」の対外的展開の要因と結果―　（野澤暁子）

バリ島先住民の村、トゥガナン・プグリンシンガンは広大な水田の地主収入による原始共同性を維持する装置として、同村に古くから存在するスロンディンを神聖視し、様々な扱いの制約を設けている。しかし、1976 年に扱いの制約を受けない「模造楽器」の製作が認められてからは、芸術大学博物館への収蔵と同大での実技指導、外部演奏グループの立ち上がり、出張演奏、バリ芸術祭での演奏、商業的録音等が行われるようになった（ただし、これらの機会では儀礼性の薄い曲目のみ演奏されている）。これら一連の活動の中心人物として、トゥガナン村演奏者のＰ氏という存在がある。

1970 年代に入るとトゥガナン・プグリンシンガン村でも観光地化が進んでいた。また、資本主義の浸透により、農業原始共同体の維持が難しい状況が生まれていた。模造楽器による普及活動は観光客増加の呼び水となると同時に、バリ文化の一要素としてのバリ・アガ文化の価値を主張する意味をもっていた。

Ｑ．模造楽器は誰が作るのか？（東日本支部・増野）

Ａ．デンパサール等の工房である。

付）野澤氏自身もスロンディンの模造楽器を所有し、演奏グループを主宰しているとのこと。（瀬戸宏）

バリ島のガムラン編成スマル・プグリンガンにおける音律体系の均質化　（杉山昌子）

16 世紀以降、宮廷器楽として伝承されてきたスマル・プグリンガンは、20 世紀初頭以降、王宮の衰退と新しいガムランの興隆により２つを残して消滅したが、３つ目のスマル・プグリンガンが芸術高校で制作された 1968 年以後、新しい楽器が順次制作されるようになった。ただし、バリ研究の先駆者であるマクフィーから語り継がれてきた音律多様論はこれら新しい楽器にはあてはまらない。

スマル・プグリンガンの基準音について古い２組と復興後の 16 組を比較した。芸術高校のものを基準にすると、古いものは＋165 セント、＋389 セントであるのに対し、復興後のものは殆ど半音内の差異に収まっている。このような均質化が生じた背景に、旋法理論の標準化や、1980 年代に流行したスンドラタリでの使用といった芸術高校の復興活動が関わっている。後者はカセットやテレビ等の影響により、楽器商による、芸術高校と同様の音律のスマル・プグリンガンの供給という現象をもたらした。

Ｑ．「音律体系」の語には基準音のみでなく音階音相互関係が含まれるべきであり、またスマル・プグリンガンではそれが重要な要素なのではないか？

（都立井草高校・瀬戸）

Ａ．この発表で「音律体系」の語を使ったのは不適切だったが、修論では音程も扱っている。復興後のスマル・プグリンガンでは、旋法理論の標準化が影響し、音程関係の多様性も狭まっている傾向にある。（瀬戸宏）

バリ島における古典儀礼曲ルランバタンの変容　（鈴木良枝）

ルランバタンはゴング・グデという古いタイプのガムランで演奏されていたが、20 世紀になって新しいゴング・クビヤルのレパートリーとして受け継がれた。ルランバタンの音楽形式は主要部分の１周期におけるクンプルの打数で規定される。デンパサールのグラダック集落には約 50 曲のレパートリーが伝承されている。

1930 年代のルランバタンは２つのタイプの番いリズムを装飾の基本とするもので、これを「クラシック・スタイル」と呼ぶ。1960 年代以降、クラシックなルランバタンに旋律的効果やテンポの変化、アンセル（旋律休止）の多用といった改編を加えた「セミ・クラシック」なスタイルを持つルランバタンが多く作られるようになってきた。この改編ルランバタンは 1960 年代の芸術高校での創作に端を発し、コンテスト課題曲への採用などの機会を通じて普及していった。古典的な楽曲に新しいスタイルのアレンジを施すことでルランバタンの伝承は強化され、若い世代に受け継がれている。

Ｑ．バリ人はルランバタンの改編を肯定しているか？（東京外語大・青木）

Ａ．基本的には肯定しているが、年寄りの中には好ましくないと考える人もいる。

Ｑ．グラダックのルランバタンの中には、年代の違い、様式の変遷がないか？（瀬戸）

Ａ．今後の研究課題である。

上記３つの報告とも、バリ島の３種のガムランの文化変容の状況が緻密な調査に基づいた論考により３様に示されていて、大変興味深いものであった。　（瀬戸宏）

◇研究発表１Ｂ（司会：三浦裕子）

謡の伝承について―宮城県北部を中心に―

（田村にしき）

田村にしき氏の発表は、宮城県北部大崎市田尻地方で活動する団体「春藤流謡曲保存会 鉢の木会」をとりあげ、保存会の発足経緯や寒稽古の実態、結婚式にて謡と民謡を併演する「お振舞」と称する儀礼の存在、さらには保存会の謡が明治中期に廃絶した春藤流の系譜を残すとする点を、インタビューより情報を得る方法で整理し、考察したものである。宮城県北部には謡を伝承する地域が３箇所存在するという。中でもこの地方において謡は、祝言をはじめとする様々な場面で所望され、さかんに謡われてきたと指摘する。これは人々と謡との関わりを探る上で興味深い事例であろう。田村氏はまとめとして、保存会の活動（謡を謡うということ）はその地域の人々の生活と密接に関わっており、謡の習得も重要な位置を占めていたと述べられた。しかし報告者の印象としては、この結論へ至るには少し直線的にすぎるように思えた。今回の発表はどの程度の調査期間に基づいたものかは明らかにされなかったが、地域コミュニティと謡との関わりに焦点を当てるのなら、限られたインフォーマントの発言や主観的な説明で論を閉じることなく、広い視野と慎重なデータ分析をふまえてほしいと感じた。保存会が春藤流の謡を伝承しているとする説に関心をよせる点は理解できるが、現在の保存会の謡＝（イコール）廃絶した春藤流の謡と無条件に認めてしまうのにも疑問が残る。今後のさらなる研究を望みたい。なおフロアからは、寺子屋にみる謡の教育との関連性や、謡を披露する場の類例、春藤流とする根拠を求める質問が出た。

（北見真智子）

江戸中期の能の謡における吟型の諸相―吟型の多様性と役柄　（丹羽幸江）

江戸期における能の吟とはどのようなものであったのか。この問題を解き明かすために、丹羽幸江氏は、江戸中期の謡本に焦点をあて、特にこれまで触れられてこなかった記号「キ」に着目し、当時の吟は現在の認識よりも多様であったことを論証した。

世阿弥が提唱した２種類の声、すなわち「祝言の声」「ばうをく（亡憶）の声」が現在の２種類の歌唱法「ツヨ吟」「ヨワ吟」に対応するか否かといった従来の２分法に対し、丹羽氏は、元禄期の謡本『当流拾遺大成謳』に見える多様な吟の指示表記や、謡伝書『唱曲弁疑』（明和５年）より５種類の吟の存在を指摘する（ツヨ吟、ヨワ吟、ウラリ、気、中吟）。また、吟は役柄と関連し、旋律型によって使い分けていたことを指摘する。特に『当流拾遺大成謳』での「キ」の箇所と『唱曲弁疑』の「気」の説明文とを照合させた結果、「キ」はヨワ吟からツヨ吟に変化する地点、そして「ヨワ」にうたう上行型旋律から「ツヨ」にうたう下降型旋律へと移行した地点に位置することを明らかにした。それにより、吟型「キ」は次第に息扱いが激しくなっていくうたい方との見解を示された。

フロアからは、現在ある「和吟（わぎん）」の扱いについて質問が出た。能における「吟」とは何か、つまり吟の正体についてはこれまで明確にとらえられてこなかったように思う。実体がおぼろげに扱われてきた中、江戸期に多様な吟が存在し、吟に対する認識がすでにあったという点を確認した今回の発表は、能の音楽史を紐解く上で、重要な研究視点を提供した発表であった。世阿弥の『五音』との関連にも言及されたことから、発展性のあるテーマとして今後の研究に期待したい。　（北見真智子）

Ｘ線調査から判明した能管・龍笛の制法　（高桑いづみ）

高桑いづみ氏の発表は、能管および龍笛の楽器史を考える手がかりとして、Ｘ線撮影という手法を用い、内部構造とその制法について考察するものであった。今回の発表は本年より開始した調査プロジェクトの中間報告として行なわれ、プロジェクトの協力者で笛師の田中敏長氏が発表に

加わる形で進行した。また、配布資料およびパワーポイントにてＸ線写真が提示された。

高桑氏は、能管が龍笛の修理から派生したとする従来の仮説に疑問を呈し、能管の内径の狭まり方に注目する。今治市村上水軍博物館蔵の能管､岩国市吉川史料館蔵の能管、徳川美術館蔵の能管（蝉折）、その他を検証した結果、１）第１指穴付近から歌口付近に２箇所の切断部分を確認しながらも喉はなく、指穴部分より肉厚の別材を接いで内径を狭めているもの、２）切断箇所は確認できないが、何らかの工夫により内径が狭まっているもの、以上これまでとは異なる制法であったことを明示した。一方、福山市安国寺蔵の阿弥陀三尊像納入品である龍笛は、一材で竹の節が残されたままであることも示された。こうした結果より、能管の内径が狭まっているのは従来の龍笛からの派生説ではなく、当初から別材を接ぐという修理とは別の意味があるのではないかとの見解を示された。

近年の科学的調査の進歩により、いままで分解修理しなければわからなかった文化財の構造や材質、制作方法の詳細が明らかにされてきている。高桑氏のＸ線による楽器調査は、人文学的調査を補強する意味でも大きな意義があるといえよう。今後も引き続き数多くの能管・龍笛を調査、検証を行っていただきたい。（北見真智子）

明治・大正期の宮中における作曲活動　（中村真由子）

中村氏の発表は、明治から大正時代にかけて宮内庁式部寮雅楽課の作曲活動とその奏楽の状況の一端を明らかにすることを試みるものであった。氏は宮内庁書陵部に所蔵されている資料を主に調査し、その結果、『保育唱歌』が明治15 年から 27 年まで式部寮の雅楽稽古所で行われた舞楽演習会で雅楽と並んで演奏会のプログラムに組み込まれ、演奏されていたこと、また宮中では皇太后の御歌に伶人が曲を付した「御歌唱歌」というジャンルが定期的に演奏されていたこと、そして奉祝行事や記念行事には、その時々にふさわしい唱歌が創作されていたことを結論付けた。フロアからの質問に対しては、明治 27 年以降に『保育唱歌』が演奏された記録が見当たらないこと、五線譜と墨譜の併用は、『保育唱歌』以降の唱歌の記譜には多く見られること、またこれらの唱歌は欧州楽の演奏の機会では奏されることがなく、あくまで雅楽とともに演奏されていたことが明らかにされた。

確かに『保育唱歌』以降の宮内庁の創作活動について、従来ほとんど言及されることはなく、それに関して「御歌唱歌」とよばれる作品群、行事で創作された唱歌を系統立てたという点で本発表は非常に意義深いものであった。ただ瑣末なことではあるかもしれないが、発表中人名の読みの不正確な箇所が散見された。基本的なことなので、今後の発表ではぜひ事前に確認してほしい。（熊沢彩子）

北村季晴による和洋合奏の意図：五線譜を媒介とした「日本音楽」創出と「古曲」保存　（奥中康人）

奥中氏の発表は、明治中期における北村季晴の「和洋合奏」の構想の全容と活動内容、そしてその限界と挫折について考察したものであった。発表では北村による詳細に記譜した長唄『勧進帳』の五線譜が提示され、その上で五線譜が邦楽器と演奏する際に互換性のあるメディアであることを示し、邦楽演奏家に「五線譜リテラシー」を啓蒙し、日本音楽を統合することを目指す和洋合奏の壮大な構想と、しかし実際には邦楽家は従来の口伝で事足りており、また北村自身が五線譜化の限界を感じたことなどによる挫折が明らかにされた。従来「際物」扱いされ、研究対象として論じられることの少なかったこの北村の活動内容や、資料『大日本音楽倶楽部規約』に現れる北村の真意から、最近盛んに議論される五線譜というメディアによる記譜や伝承の問題などが抽出され、視覚的素材を多用した発表者の手際の良いプレゼンテーションによって発表を興味深く聞くことができた。北村が演奏をそのまま記述する「直写」による五線譜から規範性を持つ「訳譜」に落ちついた根拠についての質問には、「直写」では口伝部分を反映できず、やむなく「訳譜」となったと考えられることが明らかにされた。そのほか、北村の他の活動や、当時の邦楽の状況による実例の補足がフロアから示された。（熊沢彩子）

『糸竹初心集』の「らへいか」と胡弓―キリシタン文書の楽器名から読み解く―　（神戸愉樹美）

予定の発表者が都合により発表不可能となり、また本来別の時間に行われるはずであった神戸氏の発表が行われることとなる。発表者の研究は、『糸竹初心集』中の三味線や胡弓の記述に関連した「らへいか」の表現から、それを西欧の楽器ラベキーニャと解釈することによる胡弓のキリシタン起源説が存在したことを踏まえ、キリシタン文書を精査することによってその議論に新しい視点を与えようとするものであった。結果的に発表者は、今回の考察からは、胡弓のキリシタン起源説の是非の決め手は得られないとし、『糸竹初心集』の「らへいか」を含む記述は、事実を述べようとするものではなく、西欧の文書にみられる由来書きの性格を有したものであるのではないか、という推測を導き出している。筆者はこの分野に詳しくないのだが、今回行われた一連の考察が、必ずしも今回導き出された推測と結び付けられていないように感じ、その意味でさらにこの推測を直接的に根拠付ける考察を加えて欲しかったと思う。実際フロアからもこのことに関して意見が投げかけられた。

しかし一方で、ラベキーニャとそれに類する擦弦楽器に関する記述を、膨大な文献から丁寧に拾い出した調査には、敬服するものがあり、今後の研究に意義深い資料が提示されたといえよう。（熊沢彩子）

◇研究発表２Ｂ（司会：配川美加）

上方歌舞伎における盆踊 ― 十八世紀「都風流大踊」の所演状況　（前島美保）

盆踊は、盂蘭盆会(うらぼんえ)に精霊を迎え慰めるために行われる芸能として生まれ、室町末期頃から民衆の娯楽として盛んに行われた。江戸時代の元禄頃(およそ 18 世紀初め)になると、この巷間芸能の盆踊が歌舞伎の興行の中に取り込まれ、特に上方（京・大坂）では７月の盆興行に「都風流大踊」として毎年行われ、年中行事のひとつとなったという。前島氏の発表は、元禄期以降の上方歌舞伎における「都風流大踊」を取り上げ、主に芝居番付類や絵画資料などから、この大踊の所演状況を概観するというものであった。

唄や三味線の演奏者のまわりを大勢の役者が出て一斉に踊る大踊は、江戸初期の遊女歌舞伎以来絵画にも多く描かれており、歌舞伎舞踊の古い形として重要である。この大踊形式の舞踊は江戸では定着しなかったが、京坂の歌舞伎で江戸中期まで盆興行の年中行事として行われていたことは非常に興味深い。江戸と上方では歌舞伎の興行システムが違い、番付類などの歌舞伎興行に関する資料の扱い方も江戸とは違うアプローチが必要である。そのため上方歌舞伎の、特に舞踊や音楽面での研究はなかなか難しいのも事実で、今回の前島氏のような研究を積み重ねていくことで、上方歌舞伎の舞踊や音楽の変遷、また音楽の演奏形態などが少しずつ明らかになるのではないかと思われる。今後の研究にも期待したい。（吉野雪子）

近世上方における流行歌の出版と享受について―文政 13 年(1830)の御陰参りを中心に　（黒川真理恵）

おかげ参りとは、集団を組んで伊勢神宮へ参詣するもので、江戸時代に約 60 年に１回の周期で起こったという。ある大坂商人が、文政 13 年(1830)のおかげ参りに関連した出版物（刷物、歌本、戯作など）をスクラップした「貼込帖」を残しており、この資料から当時のおかげ参りの様子や、おかげ参りに因んだ流行歌の発生や流布の様子を明らかにしようというのが黒川氏の研究である。

おかげ参りの流行歌は、その都度新しく作られるものや、従来ある歌の歌詞を替歌にしたものなどがあるというが、一過性の現象でありながら、その歌本などは上方の本屋仲間に所属する正規の版元から出版されているという。60 年に１度の周期で自然発生的に起こったといわれているが、その周期を何度か繰り返すうちに、出版業界などのメディアが刷物や流行歌の本を出版したりすることで、おかげ参りの発生を先導したり煽ったりした可能性もある、という興味深い指摘があった。「貼込帖」を残した大坂の商人も、自分はおかげ参りには参加していないが、流行歌などの本を集めて楽しんでいる。当時の大坂の出版文化の広がりが垣間見える。なお質疑応答で、幕末に起こった「ええじゃないか」との関係についての質問が出た。今のところ「ええじゃないか」の流行歌などは確認できていないという。おかげ参りとは違う突発的な集団行動ではないかと述べられた。（吉野雪子）

◇研究発表３Ａ（司会：塚原康子）

八橋検校の箏組歌『八橋十三組』について　（上野暁子）

上野氏の発表は、元禄８年までに刊行された箏歌本を書誌的に整理し、組歌の編成や詞章を比較することによって、「八橋十三組」の成立時期を考察するという内容であった。「八橋十三組」の成立については、山根陸宏氏「万治・寛文期における八橋検校の箏組歌」（『芸能史研究』85号）などの研究が知られるが、それらの成果も踏まえた上での再考察である。まず、書誌的な整理が遅れている豆本体裁の箏歌本『ことのくみ』（平野文庫本と上野学園本３種の計４本）と『峯のまつ風』（上野学園本、宮城道雄記念館本、国会図書館本、飯島氏所蔵本の計４本）を対象に、表紙、見返し、奥付、本文、挿絵などの比較が行われた。続いて、これらの豆本を加えた箏歌本８種（『琴曲抄』『淋敷座之慰』『琴のしやうか』『ことのくみ』『知音の媒』『松月抄』『峯のまつ風』『鳳鳴秘曲抄』）を対象に、組の編成や詞章の比較検証があった。その結果、天和２年の『ことのくみ』遅くとも貞享４年の『知音の媒』の時期における「八橋十三組」の成立が指摘された。そして、出版されたという状況を考えれば、実際の成立はそれ以前にさかのぼるとの結論が出された。

フロアからは、書誌的な違いと音楽的な違い（伝承者による違い）を結びつけて発展させるのがよいだろうというアドバイスがあった。

書誌的な整理が遅れている箏歌本を対象に、詳細な検証を行った興味深い発表であった。（森田敬子）

現代チベット社会におけるわらべうたの実相：
中国チベット自治区山南地区浪下子県カラ郷調査報告
（内堀明子）

本発表は、チベット自治区山南地区浪下子県カラ郷での実地調査を基に、現代におけるチベット族のわらべうたの実情を報告するものであった。調査の対象は、現地の小学生である。報告された調査の内容は、わらべうたの伝承基盤を知るための生活環境、小学校における音楽教育の現状、遊びの種類であった。遊びの種類については、写真を提示して、具体的な遊び方が紹介された。わらべうたの歌詞については、チベット語と漢語の割合に関する報告があった。

内堀氏は、カラ郷のわらべうたの創作と伝承に関する２つの相反する特徴を指摘した。１つは多元性、もう１つは民族性・地域性である。多元性の理由には、教育、テレビの普及、交通手段の発展により異文化が身近になっている状況が挙げられた。たとえば、遊びの種類には中国内地から伝わったものが多く、それらを身近なものに置き換えて遊んでいるという。また、民族性・地域性の理由には、チベット族の仏教信仰が挙げられた。遊びの動きやわらべうたの歌詞の中に、生まれ変わりなどの仏教思想が影響しているという。古くからあるチベット文化との関連についても述べられ、興味深かった。質疑では、地域差、世代による変化の時期、仏教思想に関する質問があった。（森田敬子）

東京音楽学校と邦楽科設置　（橋本久美子）

発表者は、東京音楽学校創設以来の邦楽関連略年表と昭和８年から15年までの７種類の音源を提示しながら、同11年に邦楽科が設置されるまでの歴史を述べ、邦楽科設置は音楽取調掛創設時からの理想であった「東西二洋の音楽」を備えた「日本の音楽学校」となったことの意義を述べた。また明治40年設置の邦楽調査掛の業績、乗杉嘉寿校長の社会教育論に基づく活動、当時の時代背景、洋楽と邦楽の活動、特に昭和11年に作曲家で指揮者であったプリングスハイムの欧州楽壇に照準を定めた洋楽教育と演奏活動などを検証した上で、東京音楽学校邦楽科の特徴を４項目にまとめ、今日の東京藝術大学音楽学部邦楽科の布石となったと結論づけた。質問にもあったが、東京音楽学校以外の邦楽界の動向と時代背景を語る新聞や邦楽関連の誌面の更なる検証を期待したい。ちなみに「邦楽」という用語は明治時代の造語で当初は能楽と雅楽を除外していたこと、明治・大正期は箏だけが良家の子女が嗜む楽器だったことを付言する。なお、敗戦後帰還した学生や教師の音楽活動、大正・昭和の新作邦楽や種目・流派を超えた現代邦楽の検証も期待する。（草野妙子）

「朝鮮最初の西洋音楽専門養成機関」
―梨花女子専門学校音楽科を中心に―（金志善）

1886年に設立された梨花学堂という女子専門学校は、1925年に梨花女子専門学校と改称され、同時に５年課程の文科に加え、４年課程（予科１年本科３年）の音楽科が新設されたが、この音楽科こそ、近代的なカリキュラムを整えた朝鮮（韓国）最初の西洋音楽専門養成機関である。その実態を明らかにすることによって、梨花女子専門学校音楽科が近代朝鮮音楽社会に果たした役割とその意義を考察した結果の発表であった。興味深いことは、学生の約半数以上が現在の北朝鮮出身でキリスト教信者であったこと、他学科より２倍以上の卒業生が教員になったこと、また、初期の教員はアメリカの宣教師と同校卒業後アメリカ留学を経験者が主流だったが、1930年代後半を境に大きく変化し、日本留学の教員が続々採用され、朝鮮社会における西洋音楽の教育と受容が日本経由に変化したことである。残念なことは、現在の韓国における西洋音楽の状況と梨花女子大音楽科との関係についての言及がなかったことである。（草野妙子）

◇研究発表３Ｂ（司会：蒲生美津子）

古代の大嘗祭と芸能―場の論理より奏楽の脈絡を読む―
（平間充子）

本研究は、大嘗祭という儀礼（場の論理）に核をおき、その意義がどのように芸能の奏上に反映されているか（奏楽の脈絡を読む）考察するものである。そして、日本古代史学の研究成果をふまえた上で、特に久米舞と吉志舞に焦点を当て、これらが大嘗祭で奏上されることの意義についての平間氏の独自の見解を示すことを目的としている。

配布資料には、『日本書紀』巻３神武即位前紀 戊午年に所収の久米舞の歌詞を取り上げ、その「撃ちてし止まむ」といった文言から戦闘的芸態を主張する林屋辰三郎の説に対し、久米舞は元来狩猟生活をうたった伊予地方の芸能であり、大和朝廷へ服属していく過程を示したという伝承は後で付加されたものにすぎず、テキストそのものの信憑性や、儀礼の意義は詞章に必ずしも直接反映されるとは限らないという学説を平間氏は支持する。そして、それぞれの舞を伝承した諸氏の系譜を検証した結果、久米舞の伴・佐伯両氏は山の民、吉志舞の安倍氏は海の民とし、それぞれの収穫物を神に奉納し、それを支配者が自ら食することによってその地位を神に示す、ということにその意義を見出した。

報告者の知識不足のため、史学の学問的蓄積のなかでどのような点が平間氏の新たな見解であるのか、判然としないところがあった。しかし、当該儀礼の趣旨をより正確に読み解

くという本研究の試みは、芸能そのものの意義を知る上で重要であると思われる。（近藤静乃）

平安鎌倉期の密教法会における奏舞奏楽の故実

（鳥谷部輝彦）

本発表は、平安鎌倉期の密教法会のうち、七仏薬師法・安鎮法・舞楽曼荼羅供の３法会にスポットをあて、法会中の会場・日程・次第に注目しながら、奏楽・奏舞の事例を整理したものであった。鳥谷部氏は、問題の所在を、法会における楽舞に関する従来の研究が「顕教法会」によって説明されてきた点に帰し、それに対峙するものとして密教法会に注目したという。またもうひとつの視点として、台密（天台）と東密（真言）の比較もあげている。

鳥谷部氏は『大治二年舞楽曼陀羅供次第』の「被准顕之法会故歟」という記述を引用しており、これがテーマの着想と関わりがあるものと想像するが、そもそも顕教とは密教的修法を伴わないもの、という密教側から見たカテゴリーにすぎず、その解釈も様々である。したがって、両者を単純に対立概念とすること自体に意味があるかどうか、そして比較対象として取り上げた法会の目的や格付けがまばらであることにも問題があると思われる。密教法会という括りではなく、舞楽曼荼羅供など、何かひとつに絞って考察したほうが効果的だったのではなかろうか。

発表要旨によると、鳥谷部氏の本来の目論見は、唐楽・高麗楽の日本全国へ伝播する過程を各地諸寺院の法会のなかに見ることにあり、その一環として本テーマが選ばれたものと推測される。口頭発表のなかでは特にそれに関する言及がなかったので、焦点が定まらないように感じられたのが惜しいところである。（近藤静乃）

高野山東京別院伝来の古絵図と天野社遷宮舞楽曼荼羅供

（遠藤徹、清水淑子、前島美保）

遠藤徹氏を中心とする研究グループは、数年前より高野山天野社（現：丹生津比売神社）における舞楽の歴史的変遷に関する研究調査を行っており、その成果の一部は、2006年７月の東日本支部例会で報告されている。本発表はその延長線上にあるもので、高野山東京別院において新本堂落慶(1988)以前に本堂に掲げられていたという、大型の絵馬仕立てによる４枚の古絵図のうち、特に「高野山鎮守天野宮図」に着目し、そこに描かれた天野社遷宮（20年に１度）の折の舞楽曼荼羅供について、場面の分析や文献との照合をとおして詳しく検証するものであった。

まず遠藤氏より、同グループによる2007年末の調査記録に基づいて概要が示された。この絵図の景観年代は、描かれた堂塔の焼失・再建年代を一覧することで1736〜60年に限定でき、さらにこの間に行われた天野社舞楽曼荼羅供は延享２年（1746）に限られる。また、善通寺蔵『天野舞楽宝永之記』によって次第進行と絵図を照合した結果、画面に描かれた神事は曼供とは別の時間に行ったことがわかり、本絵図は異時同図の技法によって華やかな場面が羅列されたものであるという見解が示された。

つづいて、清水氏は「天野社遷宮舞楽曼荼羅供における雅楽」と題し、舞人や楽器奏者の画面上の配置や、江戸期に天野社で行われた11回の遷宮における舞楽の事例を示し、延享２年に演奏された具体的な曲目や、出仕した楽人についても一覧で表した。

前島氏は、「天野社の神事と神楽」について、『高野春秋』等の史料における神楽の記述を紹介し、天野社宝蔵の荘厳図等と比較した結果、神楽を行う人物が描かれているのは東京別院蔵の古絵図のみであること、寛文〜天保年間に神楽で使う太鼓が高野山から天野社へ寄進されていることなどを指摘した。

発表は全体的に、スライド等を用いた丁寧な説明がなされ、理解が得られやすかった。天野社という場において繰り広げられる神事・仏事・芸能の諸相や、高野山南山進流声明の知られざる側面など、本研究によって新たな学問的見地が生まれることが期待されるので、今後の研究の動向に大いに注目していきたい。（近藤静乃）

ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ

１．第40回ＩＣＴＭ世界大会開催について

平成21年７月１日から８日まで南アフリカのダーバンで第40回ＩＣＴＭ世界大会が開催されます。会場はthe University of KwaZulu-Natalで、以下の大会テーマが設定されています。

・Postcolonialism(s) and the Future for Our Disciplines
・Reapproaching the “Popular” and the “Traditional” in the Contemporary World
・Festivals, Contests and Competitions
・Emotion, Spirituality and Experience
・Masculinities in Music and Dance
・New Research

発表申し込みはすでに締め切られましたが、参加申し込みは受け付け中です。平成21年４月15日までに申し込みますと、参加費が２〜３割安くなります。学会ウェブサイトにて申込書をダウンロードできます（http://ictm2009.Ukzn.ac.za/RegistrationForm17642.aspx）。郵送かメールの添付にて参加申込書を受け付けています。プログラム委員長は、シェフィールド大学（イギリス）のJonathan Stock（j.p.j.stock

@sheffield.ac.uk）氏です。その他詳細は、大会ウェブサイト（http://ictm2009.ukzn.ac.za/HomePage10794.aspx）をご覧いただくか、ＩＣＴＭ担当委員（早稲田みな子minako_waseda@msn.com）までお問い合わせください。

２．ICTM東アジア研究会（MEA）第２回研究会開催について

ＭＥＡは第２回研究会を平成22年８月後半（日程未定）に韓国のソウルで開催する予定です。会場はthe Academy of Korean Studies、プログラム委員長はChinese University of Hong Kong のTsai Tsanhuang（thtsai@cuhk.edu.hk）氏です。大会テーマの提案は、平成20年末日までにＥメールにてプログラム委員長までお知らせください。第２回研究会の詳細は、今後ＭＥＡのウェブサイト（http://www.gim.ntu.edu.tw/mea/index.html）およびメーリングリストにてお知らせしていく予定です。ＭＥＡについてのご質問は、ＩＣＴＭ担当委員（早稲田みな子minako_waseda@msn.com）に直接問い合わせていただいても結構です。

（早稲田みな子　ＩＣＴＭ担当委員）

臨時理事会のお知らせ

去る11月16日（日）に武蔵野音楽大学で臨時理事会が行われ、理事の役割分担、各種委員、参事が以下のように決まりましたので、お知らせいたします。

◆理事
［会長］金城厚
［副会長］澤田篤子（兼総務）
［東日本支部長］塚原康子
［西日本支部長］福岡正太
［沖縄支部長］久万田晋
［総務］遠藤徹（兼機関誌）、竹内有一（兼西日本支部担当）
［経理］植村幸生、尾高暁子
［機関誌］中川真、藤田隆則、永原恵三（兼総務）
［広報］高桑いづみ、横井雅子
［東日本支部担当］岡崎淑子

◆東日本支部
［支部長］塚原康子
［支部担当理事］岡崎淑子
［支部委員］井上貴子、奥山けい子、熊沢彩子、近藤静乃、高松晃子、谷口文和、鳥谷部輝彦、濱崎友絵、前原恵美、マット・ギラン、早稲田みな子

◆西日本支部
［支部長］福岡正太
［支部担当理事］竹内有一
［支部委員］上野正章、奥中康人、龍村あや子、田中多佳子、谷正人、山本宏子

◆沖縄支部
［支部長］久万田晋
［支部委員］大塚拜子、梅田英春、高瀬澄子

◆機関誌編集委員会
遠藤徹、中川真、永原恵三、廣井榮子、藤田隆則、山田智恵子

◆会報編集委員会
荻野珠、重田絵美、柴田真希、高桑いづみ、星野厚子、柳澤久美子、山口かおり、横井雅子

◆情報委員会
尾高暁子、葛西周、久万田晋、マット・ギラン

◆法人改革対策委員会
植村幸生、遠藤徹、尾高暁子、金城厚、澤田篤子、竹内有一

◆参事
［総務］葛西周(兼任)、清水淑子、塚原健太(兼任)、比嘉舞、森田敬子
［広報］荻野珠、重田絵美、柴田真希、星野厚子、柳澤久美子、山口かおり
［東日本支部］井土｀まりこ、大沼覚子、葛西周、滝口幸子、田村にしき、塚原健太、森真理子、山下正美、吉岡三貴
［西日本支部］薗田郁、辻本香子、出口実紀、米山知子
［沖縄支部］飯田くるみ、遠藤美奈、杉山昌子、鈴木良枝

学会ホームページがリニューアルしました

2008年９月に東洋音楽学会のホームページがリニューアルしました。URLは従来通りhttp://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/です。学会案内が詳しくなり、田邉尚雄賞のページが新たに加わりました。定例研究会や大会に関する情報は、決まり次第ホームページを通して会員のみなさまにお伝えします。また「学会からのお知らせ」も随時更新していく予定です。ぜひリニューアルした学会ホームページをご覧ください。

2008年11月には東日本支部と西日本支部のホームページもデザインが新しくなり、さらに沖縄支部のホームページも開設されました。定例研究会の詳しい案内などは支部ホームページをご覧ください。

情報委員会では、今後もホームページを通して会員のみなさまに情報を発信していきたいと考えています。ホームページに関するご意見がありましたら、webマスター（tog-homepage@mbe.nifty.com）または学会事務所（LEN03210@nifty.com）にお知らせください。

会員の受賞

◇奥中康人氏が第30回サントリー学芸賞を受賞

本学会員の奥中康人氏が、第30回サントリー学芸賞を受賞（芸術・文学部門）されました。『国家と音楽―伊澤修二がめざした日本近代』（春秋社、2008年）の著作において、現在の東京藝術大学音楽学部の創設者である伊澤修二が「なぜ唱歌にこだわり、いち早く学校教育にそれを取り入れることを提唱したかが追求される。明晰な文章による説得力のある著作」（選考委員　大笹吉雄）との評価を受けました。贈呈式は、昨年12月９日、東京・千代田区丸の内の東京会館で開催されました。

会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ

９月１日より本学会の2008年度（2008年９月１日～2009年８月31日）に入りました。折よく、本年１月から、ゆうちょ銀行と他金融機関の間で振込が可能となり、本学会口座への振込も便利になりましたので、会費納入にいっそうのご協力をお願いいたします。

まだお支払いが確認できていない方には、会費請求書と振替用紙を別便でお送りしますので、未納金額をお確かめのうえ、お早めにお振込みください。払い込み用紙を紛失された場合は、学会事務所にお問い合わせください。また複数年度の会費が未納で一括納入が難しい場合、単年度ずつ分割でお払いいただいても結構です。お支払いのあった年度にさかのぼり機関誌を送らせていただきます。なお、本会報と行き違いに納入がありました場合は、どうぞご容赦ください。

大学院に在籍中の会員各位は、「大学院生会費減額措置」を受けることができます。利用方法は学会ウェブサイトの「学会案内」に掲載されています。

第26回 田邉尚雄賞アンケートのお願い

◇アンケートのお願い

第26回田邉尚雄賞は、下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集いたします。会員各位のご協力をお願いいたします。

○選考委員　佐藤道子(委員長)、山川直治、塚田健一、龍村あや子、高桑いづみ

○対象期間　2008（平成20）年１月１日～12月31日

○アンケート締切：2009（平成21）年２月19日（木）必着

○アンケート記入事項：著者名、著書名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。

○アンケート送り先：

〒110-0005　東京都台東区上野3-6-3三春ビル307号

(社)東洋音楽学会第26回田邉尚雄賞選考委員会

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

（2008年９月～11月、訂正箇所は下線部）

＜会員移動は個人情報保護のため削除しました＞

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。（機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です）
◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。（複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等）
◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

（2008年９月～11月、到着順）

『日本音楽学会会報』第74号　日本音楽学会
『楽道』９,10,11月号　正派邦楽会
『北海道立アイヌ民族文化研究センター年報2007』
『アイヌ語地名を歩く―山田秀三の地名研究から―2008・渡島／檜山／津軽海峡』（企画展図録別冊）
北海道立アイヌ民族文化研究センター
『ぎふ民俗音楽』第77号　岐阜県民俗音楽学会
『猿田彦大神フォーラム年報　あらはれ』第11号
猿田彦大神フォーラム
『みんぱく2007　国立民族学博物館開館30周年記念事業報告』(DVD付)
『MINPAKU Anthropology Newsletter』No.25
国立民族学博物館
『音楽する身体――<わたし>へと広がる響き』　山田陽一編
昭和堂

新刊書籍

（ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物）

『アナリーゼで解き明かす新名曲が語る音楽史』
田村和紀夫 、音楽之友社、2,310 円
『イーハトーヴの夢つづり』峰章山、
ブイツーソリューション、1,995 円
『エキゾ音楽超特急　完全版』サラーム海上、若山ゆりこ、
文化放送メディアブリッジ、1,890 円
『絵で読む歌舞伎の歴史』服部幸雄、平凡社、2,730 円
『江戸歌舞伎の怪談と化け物』横山泰子 講談社、1,575 円
『江戸の大衆芸能 ― 歌舞伎・見世物・落語 大江戸カルチャーブックス』川添裕、青幻舎、1,890 円
『小沢昭一がめぐる寄席の世界 ちくま文庫』小沢昭一 、
筑摩書房、840 円
『おわらの恋風』横田庄一郎、朔北社、1,995 円
『音楽空間の社会学』粟谷佳司 、青弓社、2,100 円
『音楽大学・学校案内　2009 年度』音楽之友社、2,940 円
『雅楽―篳篥千年の秘伝』安倍季昌 たちばな出版
4,830 円
『神楽感覚』細野晴臣、鎌田東二、作品社、2,520 円
『風の名前』ジェイク・シマブクロ、講談社 、2,000 円
『歌舞伎の愉しみ方』 山川静夫、岩波書店、735 円
『上方演芸大全』大阪府立上方演芸資料館、創元社、
2,940 円
『カラー図解楽器の歴史』佐伯茂樹、河出書房新社、
2,100 円
『観世流史参究』表章、檜書店、15,750 円
『カントリー音楽のアメリカ』ロバート　Ｔ．ロルフ（ロルフ早苗訳）、南雲堂フェニックス、3,150 円
『宮内庁楽部雅楽の正統』皇室 Our Imperial Family 編、
扶桑社、15,000 円
『幻視の座』土屋恵一郎、岩波書店、3,990 円
『現代音楽×メディアアート』中村滋延、九州大学出版会、
3,150 円

『恋する落語―男と女のいろはづくし』稲田和浩、
教育評論社、1,365 円
『この落語家を聴け！―いま、観ておきたい噺家 51 人』
広瀬和生、アスペクト、2,100 円
『佐渡能楽史序説』小林責、池田哲夫、高志書院、
5,250 円
『さわりで覚える古典落語 80 選 』野口卓、柳家小満ん、
中経出版、599 円
『松竹歌舞伎検定公式テキスト』松竹株式会社、
マガジンハウス、3,150 円
『浄瑠璃御前物語の研究』信多純一、岩波書店、11,550 円
『世界なるほど楽器百科』ヤマハミュージックメディア、
2,100 円
『総力戦と音楽文化』戸ノ下達也、長木　誠司、青弓社、
3,570 円
『対位法の変動・新音楽の胎動』東川清一、春秋社、
3,990 円
『Tayutau―テルミンの小品と光の絵画』
溝口竜也、徳永雅之、冬青社、3,501 円
『地歌舞伎に魅せられて』加藤徹、近藤誠宏、岐阜新聞社、
2,999 円
『父と娘の往復書簡』松本幸四郎、松たか子、文藝春秋、
1,500 円
『能鑑賞二百一番』金子直樹、吉越研、淡交社、2,415 円
『能狂言が見たくなる講座　十撰』柳沢新治、檜書店、
2,100 円
『野田版歌舞伎』野田秀樹、新潮社、1,995 円
『林家正蔵と読む落語の人びと、落語のくらし』
小野幸恵、林家正蔵、岩崎書店、1,260 円
『ハワイアン音楽快読本』小林正巳、日本評論社、
1,890 円
『坂東三津五郎―歌舞伎の愉しみ』坂東三津五郎（10 世）、
長谷部浩、 岩波書店、1,995 円
『壁画洞窟の音』土取利行、青土社、2,310 円
『ミヤコ蝶々―女ひとり』日向鈴子、講談社、1,575 円
『もう一度学びたい落語のすべて』大友浩、西東社、
1,785 円
『もし風が見えるなら』安藤俊介、ポプラ社、1,365 円
『落語歳時記』畠山健二、文化出版局、1,365 円
『落語百景―噺家たちが生きた街、愛した街を歩く 別冊歴史読本』 新人物往来社、1,890 円
『落語への招待 （2）別冊歴史読本 古今亭志ん朝の魅力』
新人物往来社、1,890 円
『ラジオの教科書―プロが教える』花輪如一、
データハウス、2,100 円

新発売視聴覚資料

（ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物）

●ＤＶＤ

『青ヶ島の神事と芸能』日本伝統文化振興財団、4,200 円
『息から声へ―マリアの呼吸法』ツァンゲンファイント（米山文明監修）、音楽之友社、3,990 円
『歌舞伎のいき　第２巻　時代物・荒事編（小学館 DVD BOOK）』、小学館、3,990 円
『歌舞伎のいき　第３巻　世話物・和事・新歌舞編（小学館 DVD BOOK）』、
『歌舞伎のいき　第４巻　舞踊・新時代の歌舞伎編（小学館 DVD BOOK）』、小学館、3,990 円
『津山の里―酒井雅邦作品集』日本伝統文化振興財団、
3,500 円
『南洋へのまなざし―パラオと小笠原の踊りと古謡（第 23 回＜東京の夏＞音楽祭 2007　島へ―海を渡る音）』
日本伝統文化振興財団、4,200 円
『能と花の二夜（ふたや）―能「土蜘蛛」／狂言「鐘の音」』
日本伝統文化振興財団、6,300 円
『能と花の二夜（ふたや）―能「道成寺～赤頭」』
日本伝統文化振興財団、6,300 円

●ＣＤ

『インド―シャヒード・パルヴェーズのシタール（ワールドルーツミュージックライブラリ）』KICW85050、1,800 円
『シタールの芸術―モニラル・ナグ、マハプルシュ・ミシュラ（ワールドルーツミュージックライブラリ）』
KICW85009～10、1,800 円
『復刻　響―和楽器による現代日本の音楽』VZCG-8405～7、
5,000 円
『水の変態　宮城道雄作品集―砂崎知子』COCJ35135、
2,500 円
『モンゴル　チ・ボラグの馬頭琴（ワールドルーツミュージックライブラリ）』KICW85029、1,800 円

編集後記

選挙で理事、参事の顔ぶれが一新しました。それに伴い、今期は下記のメンバーで会報を担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。情報提供の場として、紙面をよりよくしようと一同考えています。お気づきの点がありましたら、是非お知らせください。（高桑いづみ）

会報編集委員
理事：高桑いづみ、横井雅子
参事：荻野珠、重田絵美、柴田真希、星野厚子、
柳澤久美子、山口かおり

第 39 回通常総会議事録（抄）・添付書類

１．日時　平成 20 年 11 月 16 日（日）　13：00〜13：45
２．場所　武蔵野音楽大学江古田キャンパス６号館 293 教室
３．出席者　326 名（委任状出席 265 名を含む）
　［備考］　正会員数 682 名　定足数 228 名
４．議事事項と審議の経過および結果
　定款第 25 条および第 15 条２により薦田治子副会長（月溪恒子会長代理）が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。ついで定款施行細則第 16 条により副議長選出がおこなわれ、澤田篤子、矢向正人の両氏が選出された後、以下の議事を審議した。

第１号議案　役員改選の件
　議長は当学会の理事、監事の任期が平成 20 年 10 月 29 日に満了したことに伴い、その後任を選出する必要を述べたところ、樋口昭選挙管理委員長より「役員改選」【添付書類１】について説明があった。議長はこの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。
　なお、被選任者は、いずれもその就任を承諾した。就任日は平成 20 年 10 月 29 日となる。

第２号議案　2007 年度事業報告の件
　小塩さとみ理事（総務担当）が「平成 19 年度（2007 年度）事業報告」【添付書類２】について説明をおこなった。議長が承認を諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第３号議案　2007 年度収支決算の件
　加藤富美子理事（経理担当）が、「財務諸表」【添付書類３】について説明をおこなった。議長がこの承認を諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第４号議案　2008 年 8 月 31 日現在貸借対照表・財産目録の件
　加藤富美子理事が「平成 19 年度（2007 年度）総括収支計算書」【添付書類４】について説明をおこなった。議長がこの承認を諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第５号議案　2008 年８月 31 日現在会員異動状況の件
　小塩さとみ理事が「会員の異動状況（平成 19 年．９．１〜平成 20 年．８.31）」【添付書類５】について説明をおこなった。議長がこの承認を諮ったところ、満場一致で可決承認された。
　また、蒲生郷昭・徳丸吉彦監事による「監査報告」【添付書類８】を蒲生郷昭監事が朗読説明した。

第６号議案　2008 年度事業計画の件
　小塩さとみ理事が「平成 20 年度（2008 年度）事業計画」【添付書類６】について説明をおこなった。議長がこの承認を諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第７号議案　2008 年度収支補正予算の件
　加藤富美子理事が、「平成 20 年度（2008 年度）収支補正予算書」【添付書類７】について説明をおこなった。議長がこの承認を諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第８号議案　その他
　議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案はとくに出されなかった。

……

[以下、添付書類]

【添付書類１】

役員選出資料
１．2008年度役員選挙　開票結果
投票締切日　　９月16日（火）
開票日時　　９月22日（月）午前10時より
開票場所　　東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系研究棟２号館２階　フォノテーク

（１）監事・理事選挙
有権者数（2008年８月１日現在）　668名
被選挙権停止者数　６名
被選挙権休止者数　２名
投票者数　139名（投票率 20.8%）

１）監事
総票数　278票　無効票数　１票　有効票数　277票
（うち白票 27）

順位	得票数	氏名
1	34	徳丸　吉彦
2	22	蒲生　郷昭
3	12	山口　修
4	11	久保田敏子
6	10	樋口　昭
7	7	竹内　道敬
7	7	蒲生　美津子
9	6	上参郷祐康

（５票以下省略）

２）理事

総票数　1112票　無効票数　０票　有効票数　1112票
（うち白票 77）

順位	得票数	氏名
1	49	塚原　康子
2	45	遠藤　徹
3	36	植村　幸生
4	31	蒲生　郷昭
5	29	福岡　正太
6	27	藤田　隆則
7	25	澤田　篤子
8	23	永原　惠三
9	20	尾高　暁子
9	20	金城　厚
9	20	久万田晋
12	19	久保田敏子
12	19	田井　竜一
12	19	高桑　いづみ
15	18	柘植　元一
16	17	竹内　有一
17	16	大谷　紀美子
17	16	塚田　健一
19	15	蒲生　美津子
19	15	小柴　はるみ
19	15	樋口　昭

（14票以下省略）

２．選考過程

（１）監事・理事選挙

理事・監事の選出については、定款施行細則第８条から第13条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいておこなわれた。

定款施行細則第11条に定めるところにより、理事および監事として重複して選ばれた蒲生郷昭については、監事として選ばれた者と認めた。その結果、理事については蒲生郷昭を除く上位10名を当選者とした。

また、選挙管理委員会は、各当選者に当選の通知をすると共に、定款施行細則第８条に基づき、理事当選者10名に対して、他の5名を合議する会議を招集した。その合議の結果、岡崎淑子、高桑いづみ、竹内有一、中川真、横井雅子の５名が理事として推薦された。

３．2008年度役員選挙　選出結果

（１）監事・理事

１）監事２名

蒲生　郷昭　　徳丸　吉彦

２）理事15名

植村　幸生　　竹内　有一
遠藤　徹　　塚原　康子
岡崎　淑子　　中川　真
尾高　暁子　　永原　惠三
金城　厚　　福岡　正太
久万田晋　　藤田　隆則
澤田　篤子　　横井　雅子
高桑　いづみ

（社）東洋音楽学会 2008 年度選挙管理委員
樋口　昭（委員長）
遠藤　徹（副委員長）
島添　貴美子
比嘉　舞
森田　敬子

【添付書類２】平成 19 年度（2007 年度）事業報告
（自平成 19 年（2007 年）９月１日　至平成 20 年（2008 年）８月 31 日）

〔１〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）

（１)公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）

・日時　2007 年 11 月 17 日
・会場　上越教育大学
・課題　「音資源の発掘と地域創造」

（２)研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）

・日時　2007 年 11 月 18 日
・会場　上越教育大学
・発表件数　19 件

（３)次年度大会の準備

・日時　2008 年 11 月 15 日～16 日
・会場　武蔵野音楽大学

（４)定例研究会（定款施行細則第３条３）

○東日本支部

・回数　６回(第34回～第39回 12･２・３・４・６・７月)
・会場　東京芸術大学、お茶の水女子大学、
国立音楽大学、大東文化大学大東文化会館
・内容　研究発表、卒業論文・修士論文・
博士論文発表、ラウンドテーブル

○西日本支部

・回数　５回(第 235 回～第 239 回　９･12･４・５・６月)
・会場　京都市立芸術大学、国立民族学博物館、
大阪市立大学
・内容　博士論文発表、講演、対談、
パネル・ディスカッション、書評フォーラム

○沖縄支部
・回数　３回（第 49 回～第 51 回　12･５・７月）
・会場　沖縄県立芸術大学
・内容　研究発表、修士論文発表、講演
〔２〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）
(５)機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款第５条２）
○第 73 号の編集・刊行
・内容　会員の論文、研究ノート、書評、書籍紹介、彙報
(６)会報の刊行
○『東洋音楽学会会報』
・第 71 号（2007 年９月）、第 72 号（2008 年１月）、第 73 号(2008 年５月)
・内容　会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息
○『東日本支部だより』
・第 15 号（2007 年 11 月）、第 16 号（2008 年３月）、第 17 号（2008 年５月）
・内容　東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
○『西日本支部だより』
・第 60 号（2007 年 12 月）、第 61 号（2008 年４月）、第 62 号（2008 年８月）
・内容　西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
○『沖縄支部通信』
・発行なし
〔３〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）
(７)日本学術会議への協力
○日本学術会議協力学術研究団体として協力
(８)音楽文献目録委員会への参加
○会員根岸正海氏（2008 年３月まで）、千葉優子氏、横井雅子氏、蒲生美津子氏（2008 年４月より）を委員として派遣
(９)国際伝統音楽学会（ＩＣＴＭ）への協力
○日本国内委員会として加盟
(10)藝術学関連学会連合への参加
○会員遠藤徹氏を委員として派遣
〔４〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）
(11)「田邉尚雄賞」
○第 24 回田邉尚雄賞の授賞
・日時　2007 年 11 月 17 日
・受賞者および受賞対象
武内恵美子『歌舞伎囃子方の楽師論的研究―近世上方を中心として』（和泉書院 2006 年２月発行）
○第 25 回田邉尚雄賞の選考と発表
・受賞者および受賞対象
ジェラルド・グローマー『瞽女と瞽女唄の研究　研究篇・史料篇』(名古屋大学出版会)
谷正人『イラン音楽　声の文化と即興』CD 付き（青土社、2007 年８月発行）
〔５〕研究および調査（定款第５条５）
(12)国内または国外における学術調査および研究とくになし
〔６〕その他目的を達成するために必要な事項（定款第５条６）
(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加応募

【添付書類６】平成 20 年度（2008 年度）事業計画
（自平成 20 年（2008 年）９月１日　至平成 21 年（2009 年）８月 31 日）

〔１〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）
(１)公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）
・日時　2008 年 11 月 15 日
・会場　武蔵野音楽大学
・課題　「板橋の田遊び（赤塚諏訪神社）」および「日本音楽研究の学際化と国際化」
(２)研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）
・日時　2008 年 11 月 16 日
・会場　武蔵野音楽大学
・発表件数　19 件
(３)次年度大会の準備
・日時　2009 年 10 月または 11 月（予定）
・会場　沖縄県立芸術大学
(４)定例研究会（定款施行細則第３条３）
○東日本支部
・回数　６回(第 40 回～第 45 回　12･２・３・４・６・７月)
・会場　東京芸術大学ほか
・内容　研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか
○西日本支部
・回数　５回（第 240 回～第 244 回　９･11･２・４・６月）
・会場 神戸大学、京都教育大学ほか

・内容　研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
○沖縄支部
・回数　３回（第 52 回～第 54 回　12・３・７月）
・会場　沖縄県立芸術大学
・内容　研究発表、修士論文・博士論文発表ほか
〔２〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）
(５)機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款第５条２）
○第 74 号の編集・刊行
・内容　会員の論文、研究ノート、研究動向、書評・視聴覚資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介ほか
（６）会報の刊行
○『東洋音楽学会会報』
・第 74 号（2008 年９月）、第 75 号（2009 年１月）、第 76 号(2009 年５月)
・内容　会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息
○『東日本支部だより』
・第 18 号（2008 年 11 月）、第 19 号（2009 年３月）、第 20 号（2009 年５月）
・内容　東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
○『西日本支部だより』
・第 63 号（2009 年１月）、第 64 号（2009 年３月）、第 65 号（2009 年８月）
・内容　西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか
○『沖縄支部通信』
・第 34 号（2009 年１月）、第 35 号（2009 年７月）
・内容　例会案内、発表内容・質疑記録
〔３〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）
(７)日本学術会議への協力
○日本学術会議協力学術研究団体として協力
(８)音楽文献目録委員会への参加
○会員３名を委員として派遣
(９)国際伝統音楽学会（ＩＣＴＭ）への協力
○日本国内委員会として加盟
(10)藝術学関連学会連合への参加
○会員１名を委員として派遣
〔４〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）
(11)「田邉尚雄賞」
○第 25 回田邉尚雄賞の授賞
・日時　2008 年 11 月 15 日
・　受賞者および受賞対象
ジェラルド・グローマー『瞽女と瞽女唄の研究　研究篇・史料篇』(名古屋大学出版会、2007 年２月発行)
谷正人『イラン音楽　声の文化と即興』CD 付き（青土社、2007 年８月発行）
○第 26 回田邉尚雄賞の選考と発表
（2009 年４月予定）
〔５〕研究および調査（定款第５条５）
(12)国内または国外における学術調査および研究
とくになし
〔６〕その他目的を達成するために必要な事項（定款第５条６）
(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供
ホームページのデザイン刷新
(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業対象誌に機関誌『東洋音楽研究』が選定されたことに伴うヒヤリング等への対応

【添付書類８】
社団法人東洋音楽学会会長　月渓恒子殿

監査報告書

私たちは、平成 19 年９月１日から平成 20 年８月 31 日までの平成 19 年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。
１．監査の方法の概要
（１）会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
（２）業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。
２．監査意見
（１）平成 19 年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
（２）事業報告書の内容は真実であると認める。
（３）理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

平成 20 年９月 29 日
監事　蒲生郷昭
監事　徳丸吉彦

【添付書類３】

貸 借 対 照 表

平成20年８月31日 現在

社団法人　東洋音楽学会　　（単位： 円）

科　　目	当年度	前年度	増　減
Ⅰ　資産の部			
1.　流動資産			
現金預金	1,303,186	1,275,897	27,289
未収入金	450,000	468,000	△ 18,000
前 渡 金	200,000	291,000	△ 91,000
流動資産合計	1,953,186	2,034,897	△ 81,711
2.　固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
支払準備基金	4,003,276	3,561,243	442,033
研究推進事業基金	4,522,275	4,522,050	225
田邉尚雄基金	3,500,000	3,650,000	△ 150,000
特定資産合計	12,025,551	11,733,293	292,258
(3) その他固定資産			
什器備品	194,802	242,475	△ 47,673
楽器	8	8	0
書籍	310,600	310,600	0
建物取得準備預金	1,818,155	1,816,438	1,717
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	149,968	149,968	0
その他固定資産合計	2,773,533	2,819,489	△ 45,956
固定資産合計	19,999,084	19,752,782	246,302
資　産　合　計	**21,952,270**	**21,787,679**	**164,591**
Ⅱ　負債の部			
1.　流動負債			
未払金	200,000	100,000	100,000
預り金	10,000	8,000	2,000
前受金	232,000	197,000	35,000
流動負債合計	442,000	305,000	137,000
負　債　合　計	**442,000**	**305,000**	**137,000**
Ⅲ　正味財産の部			
1.　一般正味財産	21,510,270	21,482,679	27,591
（うち基本財産への充当額）	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
（うち特定資産への充当額）	(12,025,551)	(11,733,293)	(292,258)
正味財産合計	**21,510,270**	**21,482,679**	**27,591**
負債及び正味財産合計	**21,952,270**	**21,787,679**	**164,591**

正味財産増減計算書総括表

平成19年９月１日から平成20年８月31日まで

社団法人　東洋音楽学会　　（単位 円）

科　　目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合　計
Ⅰ一般正味財産増減の部							
経常増減の部							
(1) 経常収益							
① 基本財産運用収入	22,246	0	0	0	0	0	22,246
基本財産利息収入	22,246						22,246
② 会 費 収 入	5,826,000	590,009	0	0	0	0	6,416,009
正会員会費収入	5,226,000						5,226,000
賛助会員会費収入	400,000						400,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		234,000					234,000
その他の収入		356,009					356,009
③ 事 業 収 入	450,000	565,000	0	0	2,100	0	1,017,100
機関誌発行事業収入	450,000						450,000
そ の 他 事業収入	0	565,000			2,100		567,100
④ 雑 収 入	36,305	0	388	283	57	0	37,033
受 取 利 息	31,895		388	283	57		32,623
雑 収 入	4,410						4,410
⑤繰入金収入	0	87,882	365,171	386,980	11,703	Δ851,736	0
							0
経常収益計	6,334,551	1,242,891	365,559	387,263	13,860	Δ851,736	7,492,388
(2) 経常費用							
① 事 業 費	2,738,301	1,242,891	365,559	387,263	13,860	0	4,704,968
機関誌作 成 費	1,194,882						1,194,882
負　担　金	191,000						191,000
印　刷　費	285,285	256,725	143,135	92,239			777,384
例 会 運 営 費			23,740	77,500	10,000		111,240
田邉尚雄賞賞金等	279,308						279,308
通　信　費	384,365	48,384	163,080	97,940	3,860		697,629
旅 費 交 通 費	288,000	94,980	3,010	110,860			496,850
給　　料		166,560	17,600				184,160
事 務 用 品 費		21,066	8,251	6,174			35,491
会　議　費	72,555	0	4,218	1,710			78,483
会　場　費		85,376					85,376
謝　　金		200,000					200,000
そ　の　他		369,800	2,525	840			373,165
減 価 償 却 費	42,906						
② 管 理 費	2,716,923						2,712,156
給 料 手 当	1,399,662						1,399,662
通　信　費	76,873						76,873
事 務 用 品 費	39,855						39,855
本 部 事務所費	743,449						743,449
事 務 委 託 費	400,000						400,000
雑　　費	52,317						52,317
減 価 償 却 費	4,767						4,767
③ 支部繰入金支出	763,854					Δ763,854	0
④ 繰 入 金 支 出	87,882					Δ87,882	0
経常費用計	6,306,960	1,242,891	365,559	387,263	13,860	Δ851,736	7,417,124
当期経常増減額	27,591	0	0	0	0	0	27,591
当期一般正味財産増減額	27,591	0	0	0	0	0	27,591
一般正味財産期首残高	21,482,679	0	0	0	0	0	21,482,679
一般正味財産期末残高	21,510,270	0	0	0	0	0	21,510,270
Ⅱ正味財産期末残高	21,510,270	0	0	0	0	0	21,510,270

財務諸表に対する注記

１．重要な会計方針

⑴ 有価証券の評価基準及び評価方法

移動平均法による原価法

⑵ 棚卸資産の評価基準及び評価方法

移動平均法による原価法

⑶ 固定資産の減価償却の方法

定額法

⑷ 消費税等の会計処理

税込み方式

２．基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

（単位円）

科　　目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
定期預金	5,200,000			5,200,000
小　計	5,200,000	0	0	5,200,000
特定資産				
支払準備基金				
定期預金	1,000,000	0	0	1,000,000
郵便貯金	1,717,122	3,616	429,140	1,291,598
普通預金		867,323		867,323
定期貯金	844,121	234		844,355
研究推進事業基金				
定期貯金	4,522,050	225		4,522,275
田邉尚雄賞基金				
定期預金	3,600,000		100,000	3,500,000
普通預金	50,000		50,000	0
小　計	11,733,293	871,398	579,140	12,025,551
合　　計	16,933,293	871,398	579,140	17,225,551

３.基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等は、次のとおりである。

（単位円）

科　　目	当期末残高	（うち指定正味財産からの充当額）	（うち一般正味財産からの充当額）	（うち負債に対応する額）
基本財産				
定期預金	5,200,000		5,200,000	
小　計	5,200,000		5,200,000	
特定資産				
支払準備基金				
定期預金	1,000,000		1,000,000	
郵便貯金	1,291,598		1,291,598	
普通預金	867,323		867,323	
定期貯金	844,355		844,355	
研究推進事業基金				
定期貯金	4,522,275		4,522,275	
田邉尚雄賞基金				
定期預金	3,500,000		3,500,000	
普通預金	0		0	
小　計	12,025,551		12,025,551	
合　　計	17,225,551		17,225,551	

５.担保に供している資産

なし

６．固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

（単位円）

科　　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高	備　　考
什器備品	576,312	381,510	194,802	
楽　　器	200,000	199,992	8	
書　　籍	310,600	0	310,600	
合　　計	1,086,912	581,502	505,410	

以上

財 産 目 録

平成20年８月31日現在

社団法人　東洋音楽学会　　（単位 円）

科　　目	金　　額		
Ⅰ 資 産 の 部			
1流 動 資 産			
現 金 預 金			
現 金　　現金手許有高	35,951		
振替口座　　郵便振替口座	611,095		
普通預金　　三菱 UFJ 信託銀行上野支店	0		
普通預金　　三菱東京 UFJ 銀行日本橋支店	419,994		
各支部　　現金、預金	236,146		
計	1,303,186		
未収入金			
アカデミア　機関誌販売代金	450,000		
計	450,000		
前　渡　金			
第 59 回大会費用前渡	200,000		
後納郵便前渡	0		
計	200,000		
流 動 資 産 合 計		1,953,186	
2固 定 資 産			
(1)基 本 財 産			
定期預金			
三菱 UFJ 信託銀行上野支店	5,200,000		
基 本 財 産 合 計	5,200,000		
(2)特定資産			
支払準備基金			
定期預金　　三菱 UFJ 信託銀行上野支店	1,000,000		
通常郵便貯金　上野黒門郵便局	1,291,598		
普通預金　　三菱 UFJ 信託銀行上野支店	867,323		
定額郵便貯金　上野黒門郵便局	844,355		
計	4,003,276		
研究推進事業基金			
定額郵便貯金　上野黒門郵便局	4,522,275		
計	4,522,275		
田邉尚雄賞基金			
定期預金　三菱 UFJ 信託銀行上野支店	3,500,000		
普通預金　三菱 UFJ 信託銀行上野支店	0		
計	3,500,000		
基　金　合　計	12,025,551		
(3)その他の固定資産			
什 器 備 品（事務用機器等）	194,802		
楽　　器	8		
書　　籍	310,600		
建物取得準備特定預金			
定額郵便貯金　上野黒門郵便局	1,818,155		
差 入 敷 金			
事務所敷金	300,000		
電 話 加 入 権			
本部電話加入権　　2 本	149,968		
その他の固定資産合計	2,773,533		
固 定 資 産 合 計		19,999,084	
資　産　合　計			21,952,270
Ⅱ 負 債 の 部			
未　払　金			
田邉賞未払	200,000		
預　り　金			
源泉所得税預り	10,000		
前　受　金			
平成 20 年度以降会費前受	232,000		
流 動 負 債 合 計		442,000	
負　債　合　計			442,000
正　味　財　産			21,510,270

【添付書類４】

総 括 収 支 計 算 書

平成19年９月１日から平成20年８月31日まで

社団法人　東洋音楽学会　　（単位 円）

科　　目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	内部取引消去	合　計
Ⅰ　事業活動収支の部							
1.事業活動収入							
① 基本財産運用収入	22,246	0	0	0	0	0	22,246
基本財産利息収入	22,246						22,246
② 会 費 収 入	5,826,000	590,009	0	0	0	0	6,416,009
正会員会費収入	5,226,000						5,226,000
賛助会員会費収入	400,000						400,000
特別会員会費収入	200,000						200,000
大会参加費収入		234,000					234,000
その他の収入		356,009					356,009
③ 事 業 収 入	450,000	565,000	0	0	2,100	0	1,017,100
機関誌発行事業収入	450,000						450,000
そ の 他 事業収入	0	565,000			2,100		567,100
④ 雑 収 入	36,305	0	388	283	57	0	37,033
受 取 利 息	31,895		388	283	57		32,623
雑 収 入	4,410						4,410
⑤繰入金収入	0	87,882	365,171	386,980	11,703	Δ851,736	0
							0
事業活動収入計	6,334,551	1,242,891	365,559	387,263	13,860	Δ851,736	7,492,388
2.事業活動支出							
① 事 業 費	2,695,395	1,242,891	365,559	387,263	13,860	0	4,704,968
機関誌作 成 費	1,194,882						1,194,882
負　担　金	191,000						191,000
印　刷　費	285,285	256,725	143,135	92,239	0		777,384
例 会 運 営 費	0		23,740	77,500	10,000		111,240
田邉尚雄賞賞金等	279,308						279,308
通　信　費	384,365	48,384	163,080	97,940	3,860		697,629
旅 費 交 通 費	288,000	94,980	3,010	110,860			496,850
給　　料		166,560	17,600	0			184,160
事 務 用 品 費		21,066	8,251	6,174			35,491
会　議　費	72,555	0	4,218	1,710			78,483
会　場　費		85,376					85,376
謝　　金		200,000					200,000
そ　の　他	0	369,800	2,525	840			373,165
② 管 理 費	2,712,156						2,712,156
給 料 手 当	1,399,662						1,399,662
通　信　費	76,873						76,873
事 務 用 品 費	39,855						39,855
本 部 事務所費	743,449						743,449
事 務 委 託 費	400,000						400,000
雑　　費	52,317						52,317
③ 支部繰入金支出	763,854					Δ763,854	0
④ 繰 入 金 支 出	87,882					Δ87,882	0
事業活動支出計	6,259,287	1,242,891	365,559	387,263	13,860	Δ851,736	7,417,124
事業活動収支差額	75,264	0	0	0	0	0	75,264
Ⅱ　投資活動収支の部							
1.投資活動収入							
特定基金取崩収入	150,000						150,000
投資活動収入計	150,000						150,000
2.投資活動支出							
特定基金等繰入支出	443,975						443,975
投資活動支出計	443,975						443,975
投資活動収支差額	Δ293,975						Δ293,975
Ⅳ　予備費支出	-						0
当期収支差額	Δ218,711	0	0	0	0	0	Δ218,711
前期繰越収支差額	1,729,897						1,729,897
次期繰越収支差額	1,511,186	0	0	0	0	0	1,511,186

【添付書類５】

会 員 の 異 動 状 況

平成19年９月１日から平成20年８月31日まで

会員種別	員　数		増減	異　動　の　内　訳
	07.9.1	08.8.31		
正会員	658＊	661	+3	新入+27(うち再入+3）、学生より+7、退会-26、逝去-5
学生会員	8	10	+2	新入+10、正会員へ-7、退会-1、
賛助会員	2	2	0	
特別会員	7	8	+1	新入+1
名誉会員	3	3	0	
	678＊	684	+6	

＊は誤記のため-2修正した数字

【添付書類７】

総 括 収 支 補 正 予 算 書

平成 20 年９月１日から平成 21 年８月 31 日まで

社団法人　東洋音楽学会　　（単位 円）

科　　目	本　部	大会会計	東日本支部	西日本支部	沖縄支部	調　整	合　計
Ⅰ　事業活動収支の部							
1.事業活動収入							
① 基本財産運用収入	22,000	0	0	0	0	0	22,000
基本財産利息収入	22,000						22,000
② 会 費 収 入	5,800,000	500,000	0	0	0	0	5,730,000
正会員会費収入	5,280,000						5,280,000
賛助会員会費収入	300,000						300,000
特別会員会費収入	220,000						
大会参加費収入		350,000					
その他の収入		150,000					150,000
③ 事 業 収 入	510,000	300,000	0	0	6,000	0	816,000
機関誌発行事業収入	500,000						500,000
そ の 他 事業収入	10,000	300,000			6,000		316,000
④ 雑 収 入	40,000	0	0	0	0	0	30,000
受 取 利 息	30,000						30,000
雑 収 入	10,000						
⑤繰入金収入	0	200,000	540,000	400,000	60,000	Δ1,200,000	0
							0
事業活動収入計	6,372,000	1,000,000	540,000	400,000	66,000	Δ1,200,000	6,598,000
2.事業活動支出							
① 事 業 費	5,918,000	950,000	540,000	400,000	66,000	0	6,749,000
機関誌作 成 費	1,200,000						1,200,000
負　担　金	200,000						200,000
印　刷　費	200,000	250,000	200,000	130,000	21,000		801,000
広 報 普 及 費	450,000						450,000
例 会 運 営 費			55,000	80,000	20,000		155,000
田邉尚雄賞賞金等	150,000						150,000
通　信　費	450,000	50,000	190,000	130,000	15,000		835,000
旅 費 交 通 費	350,000	100,000	50,000	30,000			530,000
給　　料	1,440,000	150,000	20,000	15,000			1,625,000
事 務 用 品 費	63,000		15,000	5,000	10,000		93,000
会　議　費	200,000	180,000	5,000	5,000			390,000
会　場　費							0
謝　　金							0
事 務 所 費	765,000						
事 務 委 託 費	360,000						
そ　の　他	90,000	220,000	5,000	5,000			320,000
② 管 理 費	352,000						352,000
給 料 手 当	160,000						160,000
通　信　費	50,000						50,000
事 務 用 品 費	7,000						7,000
本 部 事務所費	85,000						85,000
事 務 委 託 費	40,000						40,000
雑　　費	10,000						10,000
③ 支部繰入金支出	1,000,000					Δ1,000,000	0
④ 繰 入 金 支 出	200,000					Δ200,000	0
事業活動支出計	7,470,000	950,000	540,000	400,000	66,000	Δ1,200,000	7,101,000
事業活動収支差額	Δ1,098,000	50,000	0	0	0	0	Δ1,048,000
Ⅱ　投資活動収支の部							
1.投資活動収入							
特定基金取崩収入	1,150,000						1,150,000
投資活動収入計	1,150,000						1,150,000
2.投資活動支出	0						0
投資活動収支差額	1,150,000						1,150,000
Ⅲ　財務活動収支の部							
1.財務活動収入	0						0
2.財務活動支出	0						0
財務活動収支差額	0						0
Ⅳ　予備費支出	52,000	50,000					102,000
当期収支差額	0	0	0	0	0	0	0
前期繰越収支差額	1,511,186						1,511,186
次期繰越収支差額	1,511,186	0	0	0	0	0	1,511,186